

ベルクソンのボン・サンスとアメリカ心理学の一系譜

紺田 千登史

I

一般意味論の S.I.ハヤカワはある論文¹⁾の中で安全の追及の仕方には二つのやり方があるとし、一つは牡蠣のように硬い殻を作ってその中に閉じこもる方法であり、もう一つは、高速道路を毎日のように走っても何らの不安も感じることなく運転を続けることのできる腕前のよいドライバーのように、そのつど変化する状況に柔軟に対応していく方法である、と述べた後、心理学者の A.H.マズローの「自己実現的人間」と心理療法師の C.ロジャーズの「完全に機能する人間」を総合する形でかれのいわゆる「真に正常な人間」についてのイメージを描き出している。それによるとこうした人達は 1) 普通いわれる意味で適応できた人達、すなわち順応主義者ではないし、また、反対に社会が必ずしも自分の満足の行くような状態になくともこれに徹底的に反抗を企てるのでもない、いわば社会に対し付かず離れずの態度で臨むのを常とする人達であること、2) 自分のうちなる感情、情緒、怒りや緊張、好悪の情を的確に認知でき、防衛機制的ゆえに自己欺瞞的になったりすることはけっしてないということ、3) 未知のものに対して脅威も恐怖も感じることなく曖昧さに平然と耐えていくことが出来ること、4) 常に言葉よりも言葉が表わすものを重視する外在的な考えの持ち主であること、5) ある目的に対する手段と考えられるような事柄についても常に子供のような遊び心を持ってそれを楽しむことができるということ、6) 創造的であること、7) 最も深い意味で倫理的であること、などが特徴として

挙げられるという。

ところで、S.I.ハヤカワの「真に正常な人間」をこのように見てくると、ベルクソンがかつて「ボン・サンスの人」と呼んだ人間との間にかなりの類似点が浮かび上がってこないであろうか。すなわちベルクソンもハヤカワと同様な言い方でボン・サンス (le bon sens) というものの一般的な性格についてまず次のように述べるのである。すなわち「ボン・サンスの適応の仕方は、行動を危険なものと考え、行動を避けることで安全を確保しようとする臆病な人々のやり方とは……反対に、むしろ行動を好み、改革をもっぱら……自然なやり方で実現すべく、段階を踏んだ前進を心掛けるものである²⁾」と。そして上のハヤカワによるロジャーズとマズローの要約と比較しやすいように、ベルクソンのボン・サンス論をまとめてみるとおおよそ以下のような項目になるであろうか。すなわちボン・サンスに従う人間は 1) 社会の慣習に惰性的に従うことも、また、逆にみずからの理想に一面的に従うこともせず、一方の理想に促されつつも、社会的現実が容認しうる範囲についての的確な判断を常に持っているということ、2) 自我の社会化された側面のみを持って自我の全体とすることなくみずからの内面に対しても常に開かれていること、3) 社会的に出^し来^{たい}してくる新たな事態に対して恐怖心からいたづらに出来合いの見方にしがみつこうとするようなことはせず、素直にそれを受け容れていこうとするものであること、4) われわれの既成概念の貯蔵装置の中で最も重要なのは言語であるが、新たな事態に直面するごとに言語に含まれている既成概念の修正でこれに対応していこうとする柔軟な精神の持

1) S.I.ハヤカワ『言語と思考』四宮 満 (南雲堂) 第五章 (S.I. Hayakawa, *Symbol, Status and Personality*, Harcourt, Brace & World, Inc.)

2) H. Bergson, *Ecrits et Paroles, Tome I*. P.U.F. (以下 E.P.と略す。), p. 87.

ち主であること、5) 日常生活の反復の中にあっても新鮮な好奇心を決して失わないこと、6) 創造的であること、7) 言葉の実質的な意味で倫理的であること、以上である。

II

ベルクソンによれば、そもそもわれわれの社会にとって、一方の「習慣に凝り固まった精神」(l'esprit de routine) と、他方の「妄想に取りつかれた精神」(l'esprit de chimère) ほどの大敵はないのである³⁾。なぜなら法律として最終的に示されることになるような常識や習慣にあまり固執しすぎたり、変化を忌み嫌ったりすることは、まさに生命の条件である運動から乖離することであるし、また、それだからといって、逆にこうした習慣を直ちに乗り越えさせるような奇跡的な変化をいたづらに夢想するだけでは、的確な実践はとうてい期待できないからである。前者が眠れる精神であるとすれば、後者は眠りつつの上さらに夢を見ているという違いがあるに過ぎない、といわれる。ボン・サンスはこれに反して、眠ることも夢見ることもしない精神、一方の「最善なるものを目指そうとする大いなる理想とともに、他方で世間の事情が許す範囲についての正確な判断」⁴⁾を踏まえながらあくまでも着実に進んでいこうとする精神、そしてその意味でボン・サンスは「進歩の精神」⁵⁾である、とも言われるのである。しかしこの点についてはもう少し詳しく見ておく必要があるであろう。

まず、常識や習慣に関してであるが、これらはいずれも元は生き生きとした精神活動によって生み出された果実であることは認めなければならない。換言すれば、それらは集団的ならびに個人的レヴェルにおいて、その時々⁶⁾の社会的状況にもっとも適合した行動や思考の型として形成されたものだ、ということである。また、社会的状況に対するこうした思考や行動の型の成立は、そのよう

な状況に適応している各個人の側にも自身についての一定のイメージを、すなわちそうした社会的状況において一定の役割を担っているものとしての自覚を喚び起こさずにはおかないであろう。社会人としての自覚とか自己概念の形成などと一般に呼ばれるものがまさにこれに相当する。しかし、問題は当初それがいかに生き生きとした精神活動の果実としての意味をもっていたとしても、やがて木から落ち、干からびてしまわざるをえないものであるということ、その柔軟さを欠いたこわばりの中でついには精神活動の名残りをわずかに留めるだけのものになってしまう、ということなのである⁶⁾。換言すれば、これらはたしかに世界や自身についての一定の観念を、いわばそれらについての出来合いの地図を提供してくれるものであり、その限りではまことに重宝なものといわなければならないものではあるが、しかし反面、そのためかえって変化しゆく世界や、われわれ自身の中に生まれてくる新たな課題には的確に答えていくことがむづかしくなる、ということなのである⁷⁾。

ところで、こうした習慣や常識を社会が各個人に伝達するさいに用いる手段の中で最も重要なのは何と言っても言語というものではなからうか。われわれは言語を通してそれらをおおよそ出来合いの観念の形でまるで空気を吸い込むのと同じように吸い込みながら毎日を暮しているわけである。しかし、「こうした観念は決してわれわれの実質と同化することではなく、死せる観念として(いたづらに)そのこわばりと不動性に固執する」⁸⁾ばかりである。ベルクソンによれば、このような出来合いの観念に従った生き方というものは、折角やって来たのに、史跡や美術館をろくすっぽ見物もしないで解説書ばかりに見入っている旅行者のしていることと同じなのである。しかも考えなければならないのはわれわれの中の多くのものが生涯を通してこうしたガイドブックの中に読み取ることの出来るような諸公式にとらわれて人生を自

3) Cf. *ibid.*, p. 87.

4) *Ibid.*, p. 87.

5) *Ibid.*, p. 87.

6) Cf. *ibid.*, p. 86.

7) *Ibid.*, p. 87.

8) *Ibid.*, p. 90. (カッコ内は筆者)

分のみで見えることをすっかり忘れて旅を続けている、という点なのである⁹⁾。ベルクソンはこれには恐らく精神がたまたま放心しただけというより以上の理由が、すなわち、われわれはまず出来合いの観念を受け容れることから始め、そうした観念の一種の保護の下に生きるということがわれわれ人間の条件となっているからであろう、としている¹⁰⁾。とはいえそれらはあくまでもより高く上りゆくための足場でしかないであろう。それらが役立つしてくれるのは意志の働きによって精神が再び自己を取り戻すまでの間のことであって、やがてわれわれは言葉よりもむしろものへ、言語の中で冷たく凝固してしまった諸観念を乗り越えて、生命の熱気と運動性の探究へと向かわなければならないのである¹¹⁾。そしてそのようなことを可能にしてくれるのもまた、実は、ボン・サンスというものなのである。なぜならボン・サンスは一方で既成観念というものをなによりも恐れ、「われわれが自分の中に作り上げてしまっている意見や、用意が整っていると考えている問題解決法するときには苦しい犠牲を要求する」とともに、「われわれがあらゆる問題を新たなものとして受け容れ、新たな努力でもってこれに敬意を払うことを要求する」¹²⁾ものだからである。ベルクソンは、ボン・サンスというものは、日常の決まりきった生活においても決して無意識的自動的になったりすることではなく常にこれと「親密な仲間付き合い」¹³⁾を続けるものであって、そのおかげで状況のわずかな変化も見逃さず、必要な場合にはいつでも適切で迅速な措置を取りうるのだ、としている。ボン・サンスはなまじっかな知識にあえて安住しようとするよりもむしろ自らの無知を積極的に認め、自らの内面や外の世界には常に新たな事態の出現の可能性があるということを受け容れるのである。そして新たな事態の出現に際してはもっぱらそうした新たな事態の中からそれにふさわしい解決の道を探りだそうとするであろう。「私は……ボ

ン・サンスの中に出来合いの観念を追い払って、形成されつつある観念に場所を開け、ねばり強い注意の努力によって現実のみずからを形どりながら、たえずおのれを取り戻している知性の内的な力を認める」¹⁴⁾とベルクソンは述べている。ところで、こうしたボン・サンスにしたがった生き方が創造的であることはもはや誰の目にも明らかであるが、ベルクソンはそれが同時に優れた意味で倫理的である点にも注意している。すなわちベルクソンによれば「ボン・サンスの人」は同時に「正義の人」でもあるというのである。もっともこのように言われる場合、「ボン・サンスの人」が単に正義についての理論的抽象的な知識を持っている、という意味ではなく、むしろかれの中にまさに正義が受肉しているということなのである。換言すれば、それは生きて働く正義ということであって、どのような状況であろうとその中に絶えず浸透しようと身構えている一方で、行為と予想される結果をたえず秤にかけ、スピノザが『エチカ』で述べているように、善きものをより一層大きな悪しきものとの交換で手に入れることをとめて避けようとするのである。ベルクソンは言っている、「それゆえ正義が正義の人において実現されるさいには実践的真理に関する一種の繊細な感覚ないしはヴィジョン、あるいはむしろ機転といったようなものになる。それは正義の人が自分自身に対して要求しなければならないようなことや、他の人々からかれが期待しうることについての正確な見当を与えてくれる。それはもっとも確かな本能がするだろうように、望ましいもの、実現可能なものに向けて真直ぐにかれを導いてゆくのだ」¹⁵⁾と。しかしながらそれにしてもボン・サンスによって以上のようなことが一体、いかにして可能になるのであろうか。ベルクソンによれば、それはボン・サンスが「正義の人」において自己の社会化された部分のみをもって自己の全体と決して見誤らせることなく、常に自己の内面か

9) Cf. *ibid.*, p. 90.

10) Cf. *ibid.*, p. 90.

11) *Ibid.*, p. 91.

12) *Ibid.*, p. 86.

13) *Ibid.*, p. 86.

14) *Ibid.*, p. 88.

15) *Ibid.*, p. 88.

らもたらされる要求にも耳を傾けるようにさせるということ、しかもここにはたんに平素、生活の必要からやむをえず抑圧されている個人的な要求にとどまらず、人間としての生命の普遍的な原理に根ざした要求が含まれているからなのである。ベルクソンはなによりもそうした「生命の理解」¹⁶⁾が「正義の人」における正義の柔軟性の前提であると考えるのである。

さて、以上見たことからボン・サンスというものは、自我の内外の現実に対する「感受性」において、言い換えれば一方の日常の習慣や常識の惰性に流されないだけの普段からの気配りによって初めて維持することのできる現実感覚と、他方の善きものに対して深く感動することの出来る能力との間の調和¹⁷⁾において成立することが明らかになったわけであるが、ベルクソンの著作はある意味で、その時々に関心にもとづいてこれらの点のいずれかに強調点を置きながら論述がなされていったものである、と言えるであろう。すなわち『時間と自由』、『創造的進化』、『道徳と宗教の二つの源泉』は社会化された自己と内的な自己との関係を主として扱い、『物質と記憶』は外界の知覚というきわめて限定された形においてではあるが、絶えず変わりゆく外界の状況と、われわれの側に形成される習慣とのかわりを問うものであったのである。次に上に見たベルクソンのボン・サンスについての考え方の関連を念頭に置きながら、これらの著作でなされた議論をもう一度簡単に振り返って置こう。

III

まず、第一の点に関してこれを非常にうまく言い表わしていると考えられる有名な隠喩の引用から始めよう。「水草というものは水面まで背だけを伸ばしてくると、たえず流れに合わせて身を動かすようになる。そしてそれぞれの葉は水面上で互いに一緒になり、重なり合うことによって一定の安定を獲得する。けれども、より一層の安定を

得ているのは根っこの方であって、これは土中深くしっかりと根を下ろし、それぞれの葉を下からしっかりと支えているのである。」¹⁸⁾ここで水草とはわれわれの意識の全体をさす。そして水面上に身を浮かべながら互いに身を支え合っている葉は各人の社会化された自己の側面を表し、もう一方の水底の土中深く下ろした根の部分は、普段、すっかり忘れられてはいるが、必要な場合にはある意味で水面上に置ける社会的な自己以上に重要な働きをする深層の自己、無意識的な自己の領域を表しているのである。ところでこれら自己の二つの層についてベルクソンの最初の著作『時間と自由』ではこれとはやや違ったいいかたで次のように表現されたのだった。すなわち「われわれは、自己自身と向かい合うよりもむしろ外の世界と向かい合って生きている。われわれは考えるよりもむしろ話しをする。われわれは自身から行動するよりも行動させられている、自由に行動するとは自己自身をもう一度取り戻すことである……」¹⁹⁾と。ここで外の世界とは自然界のことなのか、あるいは人間の世界すなわち社会のことなのか、あるいは両者を同時に指すものなのか、必ずしも明らかではないが、あとの「話し」たり、「行動させられ」たりする世界は明らかに社会を指すものと考えてよいであろう。人間は蟻や蜜蜂などの昆虫と同様、集団としてまとまることによってはじめて生物としての自己保存の要求を満足させることができる。ただし昆虫社会が生来役割を指定された(有機体の構造そのものに役割がすでに書きこまれている)個体からいわば予定調和的に構成されているのに対し、人間社会ではまず、各人の言葉の学習に始まり、それを通して社会がその時点までに蓄積してきた文化をそれぞれの与えられた条件の中で習得し直していくという形で、役割の配分がもっぱら後天的に行なわれているという違いは大変大きい、といわねばならないであろう²⁰⁾。そしてこのようにして一たび一定の役割を引き受けることになった段階で、各構成員は他の仲間たちとともに前の世代が到達したところを新たな出

16) Ibid., p. 88.

17) Cf. *ibid.*, p. 94.

18) H. Bergson, *Les deux sources de la morale et de la religion*, P.U.F. (以下 D.S.と略す。) pp. 7-8.

19) H. Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, P.U.F. (以下 D.I.と略す。) p. 174.

20) Cf. H. Bergson, *L'évolution créatrice*, P.U.F. (以下 E.C.と略す。) pp. 158-159.

発点として、より一層合理的な適応形態を目指して努力することになるのである。換言すれば、昆虫社会が生得の本能によってあらかじめ形態が一定のものに決定されており、世代から世代へとほぼ同じ様式の生活が反復されるのに対し、後天的に役割の習得が行なわれる人間社会は、同時に各構成員における新たな創意工夫をも可能にし、その結果社会組織の面でも種々な変化を受け容れていく、ということである。とはいえここで重要なのは、社会組織の形態がいかに多様でありえても、われわれが何らかの社会の中で生きていかなければならないという条件は決して変わることはないという点であろう²¹⁾。そしてそのためにこれまでいつの時代、どの地域においても個人を拘束してきた常識は、これからも様々に形態を変えながら存在しつづけることであろう。なぜならベルクソンによれば「重力が身体に対して及ぼしているのと同様な力が、個々人の意思を同一方向に傾斜させることによって集団の団結を確保している」²²⁾のであるが、それが常識に他ならないからである。常識は一部法律などの形で明文化される場合もあるが、その実質は要するに一連の習慣であり、大抵の場合、各構成員によって無意識のうちに受け容れられているものである。そしてわれわれが生れて間もない頃から習得していく言葉というものが何にもましてこうした常識の重要な伝達手段となっていることはすでに述べた通りである。われわれが最初に出会う言葉——いわゆる母語——にはすでにそれまでに社会が貯えてきた一定の出来合いの意味、すなわちそれを受け容れる個人の思考や行動に対して一定の方向づけを行なう力が含まれているからである。通常、言葉は文化である、といわれるとき、まさにこうした事実をまず指しているであろう。ところで常識がこのようにすでに当該の社会における構成員の思考や行動に一定の方向性を与えるものであるとすれば、先刻触れた役割意識は特にそれらの各個人レベルにおける方向性を表わしている、といえるであろう。なぜなら各個人が分担する役割はそれ自身、大なり小なり、われわれ一人ひとりの行動

や思考を社会から期待される枠組の中に取り込もうとするものだからである。また、これにはそうした任務の遂行に対する自他の評価などの結果形成される、自己概念像なども含めて考えてよいかもしれない。しかし一般的レベルにおいて捉えるにせよ、また個別的レベルにおいて捉えるにせよ、ベルクソンにとって問題としなければならないのはこうした各個人における社会化された側面が、全体としての自己に統合されないまま、一方的に強固なものとして形成されてしまう場合なのである。ベルクソンは、権威主義的な教育などによって各個人の中に全体から切り離れた格好で、独立な人格が別個に形成される場合のあることに言及し、これを「寄生的自己」²³⁾と名付けているのであるが、社会的自己が本来の自己と乖離するときには、まさにこの「寄生的自己」の典型的なあり様を示す、といっても差しつかえがないであろう。そうした自己は実際は催眠術師に操られる人間と変わりなく、実質はロボットだ、ということである。自己というものは単にその社会化されている側面のみならず、内面には平素、われわれの気付かない広大な領域の存在していることをベルクソンが終始主張し続けることになった背景には、このような自由な自己に対する現実の社会生活の抑圧をどうしてもはねのけねばならない、という問題意識があったことを忘れてはならない。もっとも、ベルクソンの無意識といっても必ずしも単純ではなく、『時間と自由』ではC.G.ユングなら恐らく個人的無意識——といってもベルクソンの場合、ユングとは異なり無意識は常に力動的なものとして理解されているが——と呼びそうな内容のもの、換言すれば、個人の社会化の過程でやむをえず一時的に抑圧せざるを得ない個人の種々な可能性や希望の集積する領域として、『創造的進化』では普遍的生命の進化の歩みが物質的世界の抵抗のために常にその部分的な実現しか果たしえず、そのため内に貯えられる一種の衝動ないし推進力のようなものとして、そして『道徳と宗教の二つの源泉』では人間社会の閉鎖性を打ち破る可能性を秘めた人類愛の根源として理解され

21) Cf. D.S., p. 283.

22) Ibid., p. 283.

23) D.I., . 125.

ており、ベルクソンの無意識にも種々な層があることが分かるのである。純粹持続やエラン・ヴィタル、エラン・ダムールといった語がこれらをそれぞれ順番に表わす語として用いられていることは周知のとおりである。

IV

さて、ここでベルクソンのボン・サンスを考える上で見過ごすことのできないもう一つの重要な著作『物質と記憶』に議論をうつすことにしよう。この著作の中から主として取り上げなければならない事柄は、すでに指摘したとおり、知覚と習慣の関わりについてである。最初に知覚であるが、これはベルクソンにおいてもデカルトにおけると同様、物質的世界についての純粹認識をもたらすものとしてではなく、むしろ身体的存在としてのわれわれが外界と交渉していくさいに必要な知識、すぐれて実践に関わる知識をもたらすものとして考えられている点が重要であろう。すなわち、ベルクソンは、知覚の世界がわれわれの身体の「可能的行動」の世界であるという事実をまず浮き彫りにすることによって、そこにはすでにわれわれの主体の側の要素が持ち込まれている点を強調するのである。また、かれはこうした知覚をイマージュと呼びなおしたうえ、このイマージュは「観念論者の表象と呼ぶものよりは多く、実在論者のものと呼ぶものよりは少ないある存在、『もの』と『表象』との中間に位置する存在²⁴⁾と規定し、知覚的世界とは、ものごとが主観と客観とに分かれる以前の、いわば主客未分の根源的な経験の世界であるとする見方もしている。しかしわれわれが上のどちらの言い方を採るにしてもいま大事なのは、知覚におけるわれわれの側の要素と、ものの側の要素との区別を明確にすること、特に後者の側面を明らかにすることではないであろうか。なぜなら外界の経験における新たな要素というのはもっぱらこのものの側からの情報に基づく、と考えられるからである。ところでベルクソンによれば、知覚は通常そこに含まれる記憶の要素を考えない限り、物質的世界そのもの、すな

わちカントのいわゆる物自体を捉えているのであり、われわれの経験におけるまさに超越的側面を表わすものなのである。そしてこのレベルにおけるわれわれの側の要素を強いて挙げればその中味ではなくむしろその外枠、すなわち知覚には一定の選択が入っているということ、換言すればそれは物質的世界を表わすものではあるが、全体ではなくもっぱらその一部に限って捉えられているにすぎない、という点であろう。そして物質的世界の意識化がなぜこのように部分に限定されねばならないかの理由は、それこそわれわれの身体性に、すなわち他の生物と同様、身体を有する存在としてみずから守っていくために、われわれは情報をむしろ当面の行動にとって必要なものに限らねばならない、という事情に求めなければならないのである。過剰な情報、例えば極端なケースをとって、西洋の形而上学に現われる神にしばしば認められてきたような、宇宙についての全体的な知識といったものをあえて考えるとすれば、そのような知識は身体的存在者としてのわれわれにはかえって行動の妨げとなる、ということである。もっとも、われわれの知覚が物質的世界の一部に限定されている、というとき、ベルクソンにおいては、実は、二つの段階のあることを一応区別して理解しておく必要があるだろう。すなわち『物質と記憶』という書物はそもそもわれわれの日常意識の分析ということから始められているため、物質的世界それ自体が個々の独立なイマージュの相互作用の全体とみなされることとなり、知覚的世界はしたがってそうしたイマージュの総体から特定のイマージュ群が選択されて成立する、と述べられるのが第一段階であり、そのようにして選択されたイマージュ群はさらに身体という特別なイマージュを中心にその行動可能性の大小に従って遠近法的に配列され、それぞれのイマージュの現われ方にいわば濃淡の差が出てくるということ、すなわち身体に近いものほどわれわれの関心に対応する側面が一層鮮やかに表わされ、身体から遠ざかるに従って次第に一樣な色調の中に姿を消していく、とされるところが第二段階目をなしているのである。知覚の世界全体の選択がまず最

24) H. Bergson, *Matière et mémoire*, P.U.F. (以下 M.M.と略す。) p. 1.

初にあって、それがさらにわれわれの行動の緊急性の順序に従って具体的な対象の把握から抽象的なものの把握へと段階づけられていく、といっただけであろう。しかし、いずれにせよ以上がわれわれの知覚における受容性の側面のすべてであって、このレベルを超えるとただちに自発性の側面が現われ出てくることになるのである。そしてここでもまた二つの段階を区別しなければならないであろう。すなわちその第一は記憶が介入する段階であり第二はそれにたいしてさらに習慣の作用がつけ加わってくる段階である。

第一の点に関して、まず、知覚から受け取った情報を時間の順序に従って刻々に把持していくとともに、それを知覚へと順次投げ返しながら再確認を行なっていく意識の独自の働きに注目する必要があるであろう。いったい、知覚とは、ベルクソンによれば、身体の知覚器官に到達した対象からの刺激が、求心神経を通り中枢にまで達したあと、再び同じ回路を通して対象の位置にまで投げ返されるさいに成立するものである。知覚はあたかも蜃気楼現象のごときのものである、とベルクソンが言うとき、意味されているのはまさにこのことなのである²⁵⁾。ところで通常、何らかの対象が知覚される場合、それがいかに短い時間のものであっても、一定の幅を持った時間的な継起の中で生ずるものであるからには、上の刺激の循環といっただけのような事態が実は何度も繰り返し行なわれている、と考えられねばならないであろう。事実、このことがもっともはっきりと表われる例として、注意作用というものを取り上げてみると、それが一つの対象に向けられている場合であろうと、一つの状況の全体に向けられている場合であろうと、時間の経過とともにそれらの対象や状況の有している新たな側面が次々に明確にされていく一種の探究の過程と呼んでもよいような過程であることが分かるのである。ベルクソンが注意を説明するさい、これを「重要な至急報を受け取った無線士が正確を期するため、発信人まで一語一語電

信文を打ち返す操作」²⁶⁾ に例えているのはまさにこの探求的性格を明確にするためなのである。

ところで知覚にせよ、また注意にせよ、これらの意識作用の意義は、最終的にはわれわれの身体的行動を的確に導く、ということにあるであろう。ここでの確かな行動とはさし当たってはわれわれの生命の保持にとって有用なものを求め、生命にとって害になるものを避けることであるが、われわれは当初それを逡巡しながら、また、一連の手探りを通して果たしてゆくより他はないのである。試行錯誤ということが言われるが、この場合がまさにそれに相当しよう。しかしながら、たとえどのように困難を極めるように思える行動も、同様な過程が何度も繰り返されるにしたがってやがてそこに一定の型が習慣として形成されてくるであろう。そしてこの場合、みずからの同一の要求に応じてくれる対象には外見上の違いを超えて常に同一の反応をもってすることになるので、こうした要求や反応の同一性が次第に対象の側にも投影せられることになるであろう。そしてこの対象の側に投影せられた要求や反応の同一性こそ、実は、われわれが一般にももの間の「類似の知覚」²⁷⁾、すなわち種類として理解しているものである²⁸⁾。無論、類似が単に運動のレベルで捉えられている間はまだ意識的とはいえず、それはいわば「感じとられ、生きられる類似、いわば自動的に演じられる類似」²⁹⁾ でしかないであろう。しかし人類はこうした自然の営みを模倣する形で知的、意図的に類似を捉える方策を編み出したのである。すなわちそれこそ「分節せられた言語」³⁰⁾ に他ならず、一定の限られた数の人為的な運動器官をもって、無数の個別的な対象に当らせているのである。もっとも、事情がこのようだからといって、人間の言語が意識的、無意識的という違いを除けば、あたかも塩酸がチョークであろうと大理石であろうと、そこに含まれている炭酸カルシウムには必ずこれを選別し反応するのと同様だ、などといわれているわけではない。上で注意

25) Cf. M.M., p. 36.

26) M.M., P. 111.

27) M.M., p. 173.

28) Cf. M.M., p. 178.

29) M.M., p. 179.

30) M.M., p. 179.

とは、われわれに必要な側面が見出されるまで状況や対象の様々な側面が次々に明らかにされていく過程であることを見たが、言語のレベルにおいても、たとえそこにわれわれに必要な側面がいったん見出されたとしても、かようにして既に明らかになった側面やその他の未発見の側面がそれによって決して無視されるのではなく、いわば状況や対象の豊かな個性の内容として、換言すれば、他の同種の状況や対象からそれらを区別する側面として同時に押えられていくものだからである。ベルクソンはこうした事態を説明するために身体に形成される記憶としての運動習慣と、本来の記憶としての表象的記憶を比較対照し、後者を前者が他の知覚との類似をもっぱら再認するだけなのとは異なり、そのときどきの知覚の特殊相をすべて保存、再生するとした上、実際のわれわれにおける言語使用に際しては、これら両者はそれぞれ内包、外延として同時に踏まえられている事実³¹⁾に言及している。われわれの行動が下等動物におけるがごとく衝動的、自動的なものになることなく、新たに出現してくる変化にも常に柔軟に対応してゆけるのも、まさに、こうした類似とともに差異を同時に捉えていくことが出来る仕組のお蔭である、といわねばならないのである。なぜなら、類似の知覚にのみ頼るさいに現われるような行動の硬直性は、差異の知覚によって常に修正を受けることができるし、また、一たびわれわれの側の要求が変化して、同一の状況や対象においてそれまでは差異を表わす側面としてのみ捉えていたものの中から、新たに一つの別の側面をその状況や対象が所属するもう一つの類として取り出すこともできるからである。そしてベルクソンにおいてボン・サンスという語が狭い意味で用いられる場合にはもっぱらこのような知性の柔軟な仕組みを指しているのである³²⁾。

V

以上ベルクソンにおいてボン・サンスが成立するための前提として考えられている、内外二方面に向けての経験の拡大ということについて見てきたわけであるが、次に二人のアメリカの心理学者、C.ロジャーズとA.H.マズローについても同様のことが言えないかどうかを見ておきたい。そしてその際、ベルクソンの考え方との一致が果たして単なる偶然に過ぎないのだろうか、という点についても確かめておきたいと思う。

まず、この二人の心理学者に共通なのは、ベルクソンがいちおう二方面に分けて考えた経験の拡大ということ、実は、同時に起きるものだ、としているところであろう。例えばマズローはかれのいわゆる「自己実現的人間」に関して、「自分の深層にある自己を認め受け容れると、世間の現実の姿を大胆に見ることが出来るようになり、かれの行動は自発的なものとなる」³³⁾、と述べているし、ロジャーズは、みずからの内的な現実をありのままに受け容れることのできる「十分に機能する人間」は、実は、マズローの「自己実現的人間」の仲間³⁴⁾に他ならないとした上、世界に対しても「敏感に開かれており、環境と新しい関係を作る能力を信頼しているから、かれは創造的な生産と創造的生活をするタイプの人間……」³⁴⁾であり、「進化論の学者からみれば、変転する環境の諸条件のもとで最もよく適応し、生き残っていくタイプの人間」³⁵⁾であろうとしているのである。しかしながらこの二人の心理学者の議論をつぶさに読んでいくと、そこにおのずから両者の心理学における専攻領域の違いに発すると思われる微妙な違いも見えてこよう。すなわちマズローにおいては、上の二方面の経験が割合にバランスよく取り上げられているのに対し、ロジャーズの場合は隠された感情とか願望といったいわゆる深層心理の

31) Cf. M.M., pp. 174-176.

32) Cf. M.M., P. 170.

33) A.H. Maslow, *Toward a Psychology of Being*, D. VAN NOSTRAND Co. Inc. 1962. p. 132 (邦訳『完全なる人間』上田 吉一訳, 誠信書房)

34) C. Rogers, *On becoming a person*, Houghton Mifflin Co, Boston. p. 193 (邦訳『人間論』村山 正治編, 岩崎学術出版社)

35) Ibid., p. 194.

解放ということの方に重点がおかれ、環境の世界についての認知問題についてはそれほど積極的に論じられていないように思われる、ということである。そしてこのことは恐らく、マズローが、「自己実現の人間」と見られる人たちを対象に行なったアンケートに重点を置いた調査から導かれる客観的なデータの分析を通して、彼等のすべての側面に万遍なく照明を当てようとしているのに対し、ロジャーズの場合はあくまでも心理療法家として、眼前の悩み苦しんでいるクライアントの治療という実際の観点から常に物事を見ていた、ということと深く関連しているであろう。以下ベルクソンとの比較で見た場合、こうした両者の立場上の違いが果たしてどのような形で現われるかに注意しながら見ていくことにしたい。

さて、自己というものを単に社会的に限定された側面のみで捉えるのではなく、識閥下の広大な領域をも含む総体として取えていくという経験拡大の第一の方向に関していえば、マズローよりもむしろロジャーズのほうがベルクソンとより強いつながりを示しているように思われる。そしてこのことは既に述べたように、前者がアンケートを通していわば間接的に被験者に迫るという方法を主として採るのに対し、後者のあくまでもクライアントと直接に向かい合い、「クライアントと非常に深い個人的で主体的な関係に入っていく」³⁶⁾という方法上の違いと深く関連しているであろう。すなわちロジャーズの場合、クライアントに対して治療家は科学者として研究対象にたいするように関係するのではもちろんないし、また、医者として客観的な診断と治療を目指して関係しているのでもなく、あくまでも一人の人間としてもう一人の人間と相対するという関係の中でクライアントの理解がまず目指される、ということである。換言すれば、クライアントの持っている条件とか、行動とか感情などがどのようなものであろうとこれをすべて尊重し、受け容れ、そのことによってクライアントをどこまでも直接的共感的に理解していく、ということが治療の大前提となっている、ということなのである³⁷⁾。ところでロジャーズが採用するこうした方法は、ベルクソン

が『形而上学入門』において科学的分析的方法に対して掲げた直観的方法そのものの適用例ということが出来ないであろうか。もちろん、ベルクソンの場合、方法として掲げられる直観には上に見たように純粹持続や生命、愛の理解という形で示されることになるような、いわば、20世紀における形而上学の再構築ということに狙いがあったのであって、その点、ロジャーズのようにクライアントの治療という実際的な関心を目標に掲げているのとは趣をおのずから異にしていることは否定出来ない。ロジャーズにとってクライアントが治療家に対して心を開くように治療家が細心の心配りをしなければならない理由は、何よりも、クライアントがこれまでにみずからのうちに形成してきた間違った自己概念像のゆえに、彼が意識から閉め出してきたみずからの内面の現実に対してふたたび心を開かせるきっかけを見出すためであり、また、そうした経験にもとづいた正しい自己概念像の形成を新たに促すために他ならない。しかし、外見上の違いに欺かれてはならないであろう。なぜならロジャーズにおいてはたしかに間違った自己概念像のゆえに神経症などの精神的な病に苦しんでいるクライアントの救済が緊急課題となっているが、ベルクソンにおいても、われわれにあらかじめ内面の現実との接触を取り戻させることによって、日常の社会生活の中で一面的となりがちな自己にみずからの全体性を忘れないようにさせ、いうなれば治療家の門をくぐらないでも済むような手段を前以て提供してくれている、ともいえるからである。ロジャーズとベルクソンの近さには実際、われわれの想像以上のものがあるのである。

しかしそれはともかく、もう少し詳しくロジャーズを見ておくことにしよう。上のような手法を用いることによってクライアントの内面に果たしてどのような変化が生じるのであろうか。『自己が本当にそうであるところの自己となること』というキルケゴールの有名な言葉を表題に掲げた論文の中で、ロジャーズは治療の最初の段階で、まず、クライアントがそれまでの自己を単なる見せかけにすぎなかったという自覚を持つ、と

36) Ibid., p. 184.

37) Cf. *ibid.*, pp. 184-185.

いう事実を報告している。これは厳密に言えば、本当の自己を治療家に知られることについての恐れ、たとえば「私が本当に考えている私について話したくありません」³⁸⁾のような形で言い表わされるが、ロジャーズはこれを治療家に代表される他者がみとめ、かつ、かれらの目を通して自分もそのように理解してきた自己が、実はいつもの自己であったという告白にほかならない、と解するわけである。また同じような傾向のものとして例えば、両親などの価値観をそのまま受け容れた結果、自身の中に形成してきた「……でなければならぬ」³⁹⁾で表わされるような強迫的イメージ、いわゆる「良い子」であることからの解放ということも治療の初期段階における重要な変化として挙げられている。ところでこれらの例はクライアントを直接に取り巻いている何人かの特定の個人の期待に合わせようとして自己を見失ったケースといえるが、この他に文化の側からの圧力、とくに現代社会においてはホワイトのいわゆる『組織の中の人間』として期待されている人間像に合わせようとして知らず知らずのうちに自己疎外に陥る場合もあろう。そして実際にはこうしたいわば常識として受け容れてきた生き方と、みずからの内面における本当の願望との間の乖離というかたちで疎外を自覚するケースのほうが一般的ではないであろうか。ロジャーズのクライアントの一人は次のように語っている。「私は長い間、他の人々には意味があったけれども、私には全く意味の分からないものに従って生きてきました。」⁴⁰⁾と。ところで以上の証言はすべてロジャーズのクライアントが最初の段階で示す治療の消極的な側面であるが、次にそれではこうした治療の積極的な側面はどのような現われ方をするのであろうか。ロジャーズによればその第一は、クライアントが徐々に自発的になっていくことであるという。自分は一体どのようなことを目標としたいのか、「どんな活動や行動の仕方が自分にとって意味があるのかを彼自身が決定する」⁴¹⁾ようになる、と

いわれる。もっとも、このように述べられるからといって、クライアントが最初から自信を持ってそうした方向に進んでいくわけではないようだ。ロジャーズは「自己自身であることへの自由、というのは恐ろしいほどの責任を伴った自由であり、人間はそれに向かって用心深く、びくびくしながら動いていくのであって、最初はほとんど何らの自信も持ちえない」⁴²⁾と述べている。さて、このいわば手探り段階が済むと、次にやって来るのは、ロジャーズによれば、クライアントが自己を過程や流れ、変化などとして受け容れるようになることである、という。みずからの内面にむけて扉を開くことに成功したあるクライアントが次に自分が何を語るだろうか、ということさえ予見できないほど、次々に新しい思いが内面に現われ出て来る、と語る生の声を紹介したあと、ロジャーズはキルケゴールの次の言葉がこの段階のクライアントの有様を非常にうまく表現するものとして引用している。「実存する人間は常に生成の過程にある……。そしてみずからのすべての思いを過程の言葉へと翻訳するのだ。かれの思いがかれとともにあるのは……あたかも作家の思いが作家とそのスタイルとともにあるのと同じである。なぜなら何事もこれまでに成し終った、ということがなく、みずからが新しくはじめるたびに『豊かにたたえられた言葉の水を動かしていく』人間だけがスタイルを持っているからである。そしてその結果、もっともありふれた言い回しも彼には新たな誕生の新鮮さを帯びてたち現われてくるのだ」⁴³⁾。この段階のクライアントは、まさに、一個の実存として蘇っている、ということであろう。しかもこの場合、重要なのは、ひとたび過程として時間の流れの中でみずからを捉えるようになったクライアントが「そのつど自分自身のすべてでありたいという願い」(傍点はロジャーズ)をもつ、とされている点であろう。治療家はややもすると、クライアントが心を開いてくるにしたがって一方で共感を覚えるとともに他方で反感を抱き

38) Ibid., p. 167.

39) Ibid., p. 168.

40) Ibid., p. 169.

41) Ibid., p. 171.

42) Ibid., p. 171.

43) Ibid., p. 172.

がちであると言われるが、しかしそのいずれかだけでもってクライアントと接するようなことがあっては決してならないのである。なぜならそうした選択は、おのずから治療家によるクライアントの把握を一面的なものとすると共に、クライアント自身の自己把握も不可能にしてしまうだろうからである。ロジャーズによれば、クライアントの複雑な心境はあくまでも複雑なままで受け容れなければならないのである。そうすることによってはじめてクライアントもみずからの内なる経験に対して一層開かれ、親しみを増し、みずからの経験と密着しながら生きていくことが、すなわちかれが『本当にそうであるところの自己となる』⁴⁴⁾ことができるからである。

VI

ところでロジャーズがクライアントの内面に迫るさいに用いる方法がこのようにベルクソンの直観に酷似する面を示しながらも、ロジャーズが直接ベルクソンに言及している個所も、またかれから学んだらしいという形跡も窺うことが出来ない。ただロジャーズとベルクソンとの間に関係らしい関係を求めるとすれば、かれがたびたび引用するマズローを介してだ、ということになろう。マズローの方は、ホワイトヘッドやW.ジェイムズなどと共に、ベルクソンの認識についての見解から非常に多くのことを学んでいるからである。例えばマズローが『動機とパーソナリティ』⁴⁵⁾の中の「個別的なものと類的なもの」という題目の下に展開している議論ではその冒頭から早速にベルクソンの『創造的進化』の次の文章の引用を行っているのである。「理性が、自分に提示されている対象を知らないと告白する場合でさえ、その理性は、自分の無知は、ただ昔からある範疇のどれがこの新しい対象にぴったりなのか分からないためばかりである、と信じている。いつでも開けることのできるどの引き出しに、一体、それをおさめれば良いのであろうか？すでに仕立ててあるどの服を、それに着せれば良いのであろうか？

これだろうか、あれだろうか、それとも別のものだろうか？そして<これ>とか<あれ>とか<別のもの>などというのは、いつでもすでに説明され、知られているものなのである。新しい事象に対しては新しい概念を、恐らく新しい思考法をあらゆる素材を用いて創り出さなければならないこともある、などと考えることは、われわれにとって非常に厭わしいことなのだ。しかしながら哲学の歴史というものが、われわれにいつ果てることもない体系間の葛藤や、現実に既成概念という既製服を着せて満足することが不可能であること、実際に寸法を取って仕事をする必要のあることを示している。しかし、われわれの理性は、こうして窮地に落ち込むよりも、傲慢な謙遜さで、みずからは相対的な物事しか認識出来ず、絶対的なものはその領分ではない、と断言するほうを選ぶ。そしてこの前以ってなされる宣言が、何のためらいもなく従来の思考法を用い、絶対的なものには触れていない振りをしながら、すべてのことに対して絶対的な判断を下すことを可能にしているのである。プラトンは、真実を知ることはそのアイデアを発見することにある、という理論を初めて打ち立てた。すなわち、真実を知るとは、あたかも暗黙のうちに普遍的な知識を持っているかのように、自分たちの自由になる既存の枠の中に物事を強引に当て嵌めてしまうことである、というのがかれの理論なのである。もっとも、この信念は、既存のどの項目が新たな事象を分類するのにぴったりするか、ということにいつも一所懸命になっている人間の知性には無理からぬことであって、ある意味では、われわれはすべてプラトン主義者として生れついている、といえるかもしれない。⁴⁶⁾ところでマズロー自身がこのような認識の問題を取り上げるようになった直接の動機というのは、アメリカの心理学において一般に採用されている方法があまりにも主知主義的な方向に偏向していることに対する反発からである、という。マズローは言う、「一般的に言って、大抵のアメリカの心理学は、あたかも現実が変化し、発展するよりもむしろ固定され、静止的なものであるかの

44) Ibid., p. 173.

45) A.H. Maslow, *Motivation and Personality*, Harper & Brothers 1954.

46) Ibid., pp. 261-262, E.C., pp. 48-49.

ように(過程であるよりもむしろ状態であるかのよう)、また、相互に結合し合い、模様状になっている、というよりもむしろ、非連続で、次々とつぎ足されていくものであるかのように手続きを行なっている。こうした現実の動的で全体的な様相に目をむけていないことが学問的な心理学の多くの弱点や欠陥の原因となっている⁴⁷⁾と。また言う、「現実とは動的であるのに近代西洋の人間は静的なものしかうまく認識出来ないため、われわれの注意や知覚、学習、記憶、思考といったものの多くは、実際には現実そのものよりもむしろ現実からの静的な抽出物、ないし理論的な構築物と関わっているのである⁴⁸⁾と。そしてこれらの文章に引き続いてマズローが具体的に取り上げているのもまさにこの注意、知覚、学習、思考にまつ様々な問題点についてなのである。詳しく論じる余裕はないが、次にこれらの中から特に重要と思われる点にかぎって見ておくこととしたい。その内容が先刻のベルクソンの『物質と記憶』の議論におどろく程近いことが分かるであろう。

まず、注意に関してマズローは、一般に、「注意を払う人の心にすでに存在している一組の範疇の外界における……再確認⁴⁹⁾」がそのすべてであるかのように見做されがちであるが、注意には実は、もう一つ別種のものであって、後者は事象の独自の側面にもっぱら向かうものである点を強調している。すなわちマズローによれば、この事象の独自性に向かう注意とはフロイドの「自由に浮遊する注意⁵⁰⁾と同じであって、これはわれわれが普段やるように現実の世界に対して一連の期待を押し付けるのとは反対に、逆にあくまでも控え目に、また、受動的にこれと対応し、現実がわれわれに告げなければならないことを見つけることにのみ関心を持ち、素材の本質的な構造にもっぱらわれわれが知覚するものを決定させることにおいて成立する、とされる。換言すれば、われわれは経験というものを「それがどのように理論や考

え、概念などにあてはまるかを確かめるのではなく」逆にどこまでも「唯一のものとして、この世の他のいずれのものとも似ていないものとして」ただただ経験「それ自身の本質を理解すべく努力をしなければならない⁵¹⁾」ということなのである。マズローは前者の注意を「自己中心的」と呼ぶのと区別して後者を「問題中心的」と呼ぶのであるが、この点については更にベルクソンがしばしばやったように、そして実際にベルクソンにも言及しながら、芸術家と科学者の経験に対するアプローチの仕方の違いを明らかにすることによっても示そうとしている。すなわち「科学者は経験に名前をつけたり、ラヴェルをはったり、しかるべき場所に置いたり、要するにそれを分類しようとする傾向が強い。芸術家はこれに反し、もしも彼が芸術家の有るべき姿を満たしているならば、ベルクソンやクローチェその他によれば、自分の経験の唯一で特異な性質に最も興味を持つ。芸術家は経験を必ず個別に取り扱う。一つひとつのリンゴは唯一で、他とは異なっている。同じことはモデルや木、顔などにも言える。他のものと全く同じだ、というものは存在しない。ある批評家がある芸術家のことを言ったように、『かれは、他の人々が単に一瞥を与えるに過ぎないものに対してじっくりと見入るのだ』と。」⁵²⁾ところで、マズローのこうした物事を範疇に分ける注意、ならびに事象の独自性をとらえる注意は、それぞれベルクソンの運動習慣と表象的記憶の働きにまさしく対応しているということが出来るであろう。しかもベルクソンはいったん区別した知覚と運動習慣を狭い意味でのボン・サンスにおいて再び結びつけていたように、マズローも、ものごとの諸範疇への分類を全面的に否定するのではなく、それが常にものごとの独自性を踏まえているかぎりは問題はない、という形で、両者が結局のところは相補的な関係のものである点を指摘するのを忘れないのである⁵³⁾。つまり、事物の独自性の認識が

47) Ibid., p. 262.

48) Ibid., p. 263.

49) Ibid., p. 263.

50) Ibid., p. 265.

51) Ibid., p. 266.

52) Ibid., pp. 266-267.

53) Cf. *ibid.*, p. 262.

マズローにおいてもっばら強調せられているような印象を与えているとすれば、それは通常、われわれがものごとの分類ということを一面的に重視しすぎていることに対するバランスを取る必要からであって、これは一種の表現上の工夫の問題と考えておけばよいのではないかということなのである。次の知覚に関する議論においても実は同様なことが言えるであろう。

さて、知覚においてもまず第一に言われることは、それが経験を吟味するよりも分類したり、札をつけたり、ラヴェルをはったりすることの方が多し、という点である。そしてマズローはここでは特に一般意味論の学者達と同じく、人間を分類するさいに生じる問題点を主として取り上げるのである。すなわち例えばある人に引き合わされて、その人を新鮮に感じたり、独自の人間として、現存する他の誰とも似ていないものとして理解したり、知覚したりしようとすることはあるかもしれないが、しかしわれわれがそれより一層よくやっていることはその人間に札をつけたり、ラヴェルをはったり、一定の範疇に位置付けたりすることだとした上、そうしたことが当の人間にとっていかに心外なことであるか、マズローはまず W. ジェイムズの若干ユーモアを交えた次の文章の引用から始めるのである。すなわち「知性がある対象に対してまず第一に行なうことは、その対象を別の何かといっしょに分類することである。しかし対象が非常に大切で、われわれの尊敬の念を呼び起こすような場合には、独自で、唯一なものと感じられるであろう。たぶんカニさえもわれわれが何のぞうさもなく、弁明もなしにそのカニを甲殻類と分類し、それでかたづけしてしまったとしたら自分自身の身にかかわる侮辱を受けたと感じて『わたしはそのようなものではない、わたしはわたしであり、あくまでもわたし自身なのだ』というであろう」⁵⁴⁾ というものである。ところでマズローによればカニがこのような反応をするのは、実は、一般意味論の人達が言うように、ひとたびある個体が一定の範疇に分類されたりする

と、人はもはやその個体を見ることをやめ、もっばら、その範疇に対して反応するようになるからなのである⁵⁵⁾。しかもこのカニの例でも明らかのように、われわれを時には怒りに導くこともある分類という操作は、ベルクソンにおいても見た通り、大部分は後天的に一定の学習過程を経て獲得した習慣に基づいている、ということができであろう。すなわちわれわれを取り巻く世界には一定の割合で反復し変化しない部分が常に含まれているのであって、そうした部分との交渉になれ親しむにしたがって次第にわれわれの反応に一定の型が形成され、またそうした同一の反応様式に対応する対象や対象間の関係に対し同一の名称を与えることになる、ということである。換言すれば、われわれの対象や関係に対する反応がこれまでに形成せられてきた型で間に合う場合にはつねに同一の名称や範疇のもとに分類される、と言ってよい。マズローは「習慣とは、現在の課題を以前にうまく解決できた方法を用いて解決しようとする試みのことである」⁵⁶⁾ とした上、このことはまず現在の課題をある範疇に位置づけること、そして次にこの特定の範疇に位置づけられた課題に最も効果的な解決法を選択することの二つからなる、としている。しかしいかに変化せず、もっばら反復しているだけのように見える部分であっても、実際に全く同じものが二度出現するなどということは決してないであろう。この世界は一見そうでない部分も含めて絶えず流動変化している、というのがむしろ正しい言い方なのだ。一つひとつの経験や出来事、行動はそれがいかなるものであれ、この世に既に起こったことのある、または、これから起こるであろう他のすべての経験や行動とは異なっているのである。⁵⁷⁾ それゆえ一定の範疇に分類されるようなすべての反応は、絶えず変化してやまない世界の動きをもっばら処理しやすくするためそれを「凍結し、固定し、止め」⁵⁸⁾ しようとする努力に他ならないとも言える。なぜならわれわれがこの世界を適当に処理できるようになるのは、世界がその動きを停止しているときだけの

54) Ibid., p. 271.

55) Cf. *ibid.*, p. 268.

56) Ibid., p. 271.

57) Cf. *ibid.*, pp. 271-272.

58) Ibid., p. 272.

ように思えるからである⁵⁹⁾。だが幸いなことに、こうしたことがわれわれの学習のすべてに妥当する議論なのではない。マズローによれば、上のようなことはもっぱら「断片的で再生的な学習にのみ、すなわち断片的で特別な反応の再認と再生」⁶⁰⁾に当てはまるに過ぎない。しかし学習にはこれ以外にわれわれの人格全体に影響を及ぼすような性格学習、ないし内発的学習というものがあるのである。すなわちそれは、われわれのすべての経験が性格に及ぼす影響の全体のことであって、とりわけ人生における深刻な経験は人間全体をすっかり変えてしまうものなのである。「例えば、ある悲劇的な経験がもたらす影響は、未熟な人間を一層成熟した成人に、より賢明でより寛大、より謙虚で成人の生活でぶつかるいかなる（傍点はマズロー）問題でも解決できる人間に変える」⁶¹⁾ということなのだ。もっとも、議論がここまでくると

内面における経験というものと、外界のそれとの先刻来の区別がはなはだあやしいものとなってくるであろう。なぜならここでは外の世界が内の世界に、内の世界が外の世界に影響を及ぼしているように思われるからである。しかしここでも言葉に欺かれてはならないであろう。そもそも内とか外という語は、人格というものに関してはなによりもまず、全体と部分の区別を表わすものであって、いわゆる内的な経験と思える経験も実際には外的な経験でしかなかったり、逆に外的と思われたことが内的に深く影響を及ぼしていくことはおおいにありうることなのである。重要なことはむしろ、全体の変化は必ず部分の変化をもたらす、と言えるのにたいし、部分の変化は必ずしも全体の変化をもたらさない、ということではなからうか。

59) Cf. *ibid.*, p. 272.

60) *Ibid.*, p. 273.

61) *Ibid.*, p. 274.